

奈良国立博物館所蔵『明月記』断簡

野 尻 忠

一、はじめに

『明月記』の研究は、特に近年、活況を呈している。中世文学・歴史学研究者を中心に明月記研究会が組織され、研究誌『明月記研究』が一九九六年に創刊されて、現在一〇号まで刊行されている。そして本年（二〇〇六年）十一月、これまでの成果を集大成するかたちで、『明月記』研究の必携書とも言える『明月記研究提要』（八木書店）が刊行された。

『明月記』は鎌倉時代初期の歌人として著名な藤原定家（一一六二～一二四二）の日記で、記事の詳細さと特徴ある筆跡とで夙に知られている。冷泉家の時雨亭文庫に定家自筆原本がまとまって残っているが、⁽¹⁾一部は巷間に流出しており、断簡として各地に所在している。早く明治四十四年（一九二一）に、帝国大学史料編纂掛が収集・採録した謄写本を底本として、国書刊行会から翻刻本が刊行されて以来、⁽²⁾長い研究の蓄積があり、当該期を研究するうえで欠かせない史料と位置づけられている。

奈良国立博物館が所蔵する『明月記』の断簡は、巷間に流出したものの一つであるが、国書刊行会本には翻刻されていない。また、

辻彦三郎氏によって集成された、流出断簡も含む自筆原本の所在一覧⁽³⁾（一九七七年）にも、本断簡は掲載されていなかった。その後、辻氏の集成以後に発見されたものを追補した自筆原本所在目録が、尾上陽介氏によってまとめられ⁽⁴⁾（二〇〇二年）、この所在目録に本断簡は年次未詳断簡として初めて掲載された。⁽⁵⁾尾上氏はその後も原本所在目録を補訂されており、二〇〇六年二月に発表された目録⁽⁶⁾では、建仁元年四月二十二日条として掲載され、⁽⁷⁾前述した『明月記研究提要』所載の一覧表にも同様に掲載されているが、原本の所在は不明とされている。

本断簡は、当館の平常展では展示されたことがあるものの、最新の研究でも所在不明とされているように、その存在が広く知られているとは言いがたい状況であり、ここにやや詳しく紹介し、所蔵者としての責を果たしたい。

この断簡は縦三〇・八、横二五・一センチメートルと短いもので、現在は掛幅に装丁されている。全十三行で、五行目の位置（右辺から約八・五センチメートル）に縦方向の折り目が入る。すでに知られているように、『明月記』原本は折本に装丁されていた時期があり、二二・二五センチメートルおきに折り目の痕跡が残っているのが通例で、本断簡が自筆原本であることを証する一つの根拠となっている。

また、現状では紙背文書はないが、剥がし取られた痕跡が認められる。なお、本品は一九九九年に当館の所蔵に帰した。

二、釈文

(前欠)

詩

船刺、先下北面物二人令着之、宋人舁云々、異様物也、

件兩人非近習非念人可無便之由、内府被定、忽

以白拍子女被着改、不堪船刺、仍白張船差又刺之、

管弦船、着左右樂人装束念人下北面二人也、皇后宮大夫、左兵

衛督、隆仲三人乗之通方又着白水干、乗不得心、哥船船刺同下北面、念人装束着之、

与頭兼乗之、刺出之間寂蓮参入、仍刺返乗之紗墨、染也、

参北殿釣殿辺三船暫留、在池上、保家朝臣参上申此由、即出御

乗御了、公卿以下皆乗、渡御南殿釣殿了、和哥

尚「渡御南殿」齒会七叟可着座之由、有内府命、是兼

儀也、第一座寂蓮、戴冠以紙捻、結之、着有文冬直衣

相儲令、着之、次々守位次着座、白拍子女四人許、着上下

装束、各引其手扶持云々、「実教」宗頼、定輔、親経、

頭兼、下官等也、各着円座、

(後欠)

13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1

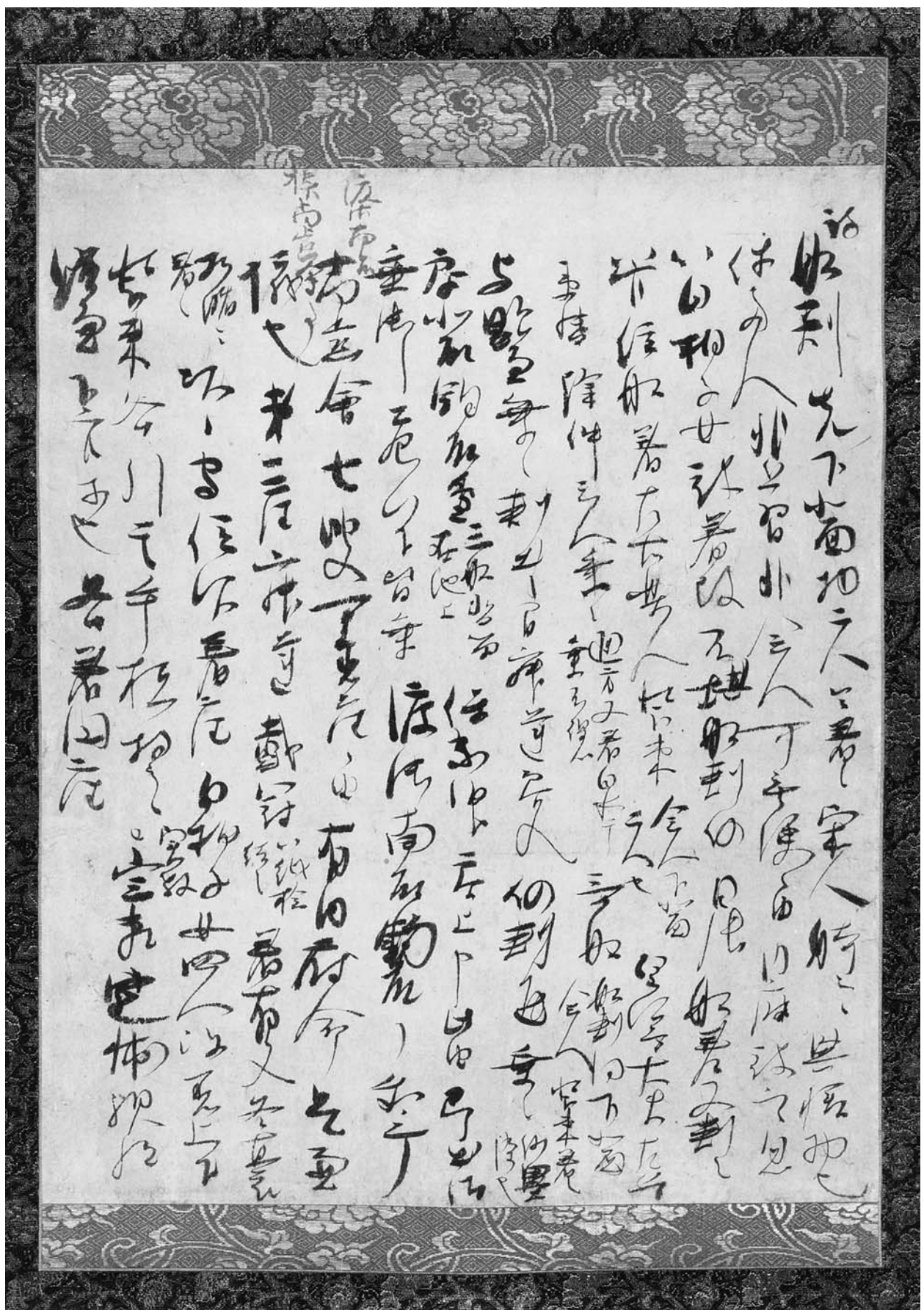
三、内容

ここに記されるのは、鳥羽殿における遊興の場面である。記事の詳細な内容や、この日にこうした行事が行われたことの意義等については、家永香織氏の研究(注7論文)に尽くされているので、こちらに譲ることとし、ここでは要点を記すにとどめる。

池には詩船(1。数字は釈文の行番号)、管弦船(4)、歌船(5)の三隻の船が浮かべられた。詩船には二名の北面武士が船刺(船頭)として乗ったが、奇態な服装であつたらしく、内府の命令で白拍子と交代させられたといい、管弦船には樂人の装束をまとった船刺二名のほかに皇后宮大夫、左兵衛督、藤原隆仲が乗り込み、歌船には念人(ねんにん/おもいびと)の装束をした船刺が乗ったほか、はじめ定家と源頭兼が乗り、後から寂蓮が参入して乗り込んだ。三船は暫く北殿の釣殿の辺りに繋留していたが、藤原保家からの連絡を受けた後鳥羽院および列席の公卿等も皆、船に乗り込んで南殿へ渡った。その後、「和歌尚齒会」が催され、参会する七叟(七人)のうち第一座には寂蓮が着し、他も順次着座した。寂蓮と並んで七叟を構成したのは、続いて名前の出てくる藤原実教、藤原宗頼、藤原定輔、藤原親経、源頭兼、定家の六人と思われる。

四、登場人物

断簡中には、実名で登場する人物が八名、官職名で登場する人物が三名いる。彼等の略歴を、建仁元年前後の官途を中心に、和歌尚



尚齒の主役となった寂蓮(6、10)から順に紹介したい。

寂蓮(?～一二〇二)は、俗名を藤原定長といい、従五位上中務少輔まで至ったが、承安二年(一一七二)に出家。歌人として知られ、建仁元年(一二〇一)十一月に定家等とともに『新古今和歌集』撰者六名の一人に任じられたが、完成を見ずに翌建仁二年七月に没した。没時の年齢は不詳だが、六十歳を少し超えたくらいかと推定されている。生年は保延五年(一一三九)頃とする説と、康治二年(一一四三)頃とする説がある⁽⁸⁾。

「尚齒会」に列席した実教(12)は、『明月記』にたびたび登場する藤原実教(一一五〇～一二三七)で、文治四年(一一八八)に参議に任じられて公卿に列し、中納言正二位に至った人物。衛府の長官を兼帯したほか、皇后宮権大夫を務め、建仁元年(一二〇一)正月二十九日には皇后宮大夫となった。管弦を得意とし、特に笛の技に秀でていたという。建暦二年(一二二二)に出家し、安貞元年四月に没した。建仁元年当時の官途からみて、三船の催しで管弦船に乗った皇后宮大夫(4)も実教のことと思われる。

宗頼(12)は藤原宗頼(一一五四～一二〇三)。建久六年(一一九五)七月、従三位に叙せられ、同年十二月に参議となり、同九年十二月に権中納言。建仁二年(一二〇二)には権大納言に至ったが、翌三年正月に出家し、まもなく没した。

定輔(12)は藤原定輔(一一六三～一二二七)で、建久二年(一一九二)に参議となって公卿に列した人物。のち権大納言に至るが、その間、左兵衛督(正治元年(一一九九)六月二十三日任)等を兼帯したほか、建仁元年(一二〇一)には検非違使別当にも任じられている(同年の何月かは不詳。九月とする史料もある⁽⁹⁾)。貞応二年(一二二三)

出家。安貞元年七月没。琵琶の演奏に優れていたという。三船の催しで管弦船に乗った左兵衛督(4)も定輔であろう。

親経(12)は藤原親経(一一五一～一二二〇)で、弁官を歴任した後、正治二年(一二〇〇)参議となって公卿に列し、権中納言に至った人物。詩文に優れ、『新古今和歌集』の真名序を作成した。承元四年没。顕兼(6、13)は『古事談』の編者である源顕兼(一一六〇～一二一五)で、歌人としても知られた。仁安三年(一一六八)従五位下に叙され、加賀権守、刑部卿等の官職を歴任。承元二年(一二〇八)に従三位となり公卿に列した。建暦元年(一二二一)出家。建保三年没。和歌尚齒会に列席したのは以上の六名と定家だが、断簡中には他に三人が登場する。

隆仲(5)はおそらく藤原隆仲で、『公卿補任』によれば建保二年(一二二四)に従三位に叙せられており、時に三十二歳とあるので、生年は寿永二年(一一八三)と推測される。

保家(7)は藤原保家(一一六七～一二二〇)。加賀守、侍従、紀伊守、淡路守等を歴任し、文治五年(一一八九)に右近衛少将、建久九年(一一九八)二月に正四位下、同年十二月に権中將に転じた。建仁二年(一二〇二)十月、従三位となり公卿に列す。その後、権中納言まで至るが、承元四年に病気のため出家(ときに従二位)。すぐに没した。

最後に内府(2、9)は、村上源氏出身の源通親(一一四九～一二〇二)。後白河院政期には九条兼実と対立し、後白河院没後に源頼朝と接近して兼実を失脚に追い込み、その後、後鳥羽院と結んで政界で重きをなした。正治元年(一一九九)正月に内大臣となり、建仁二年十二月に没するまでその地位にあった。

五、「模尚齒会」について

ここで、寂蓮を首座として催された尚齒会について簡単にまとめておく。⁽¹⁰⁾これも先述した家永氏の研究(注7論文)に詳しく論じられているので、併せて参照されたい。

尚齒会は、唐の会昌五年(八四五)、当時七十四歳だった白居易が自分より年上の六人を自邸に招き、七老で過去を顧み長寿を祝う詩宴を催したのを起源とし、これがわが国に伝わったものである。貞観十九年(八七七)三月に南淵年名が主催したのを初見とし、平安時代では安和二年(九六九)、⁽¹¹⁾嘉保三年(一〇九六)、⁽¹²⁾天承元年(一一三一)、承安二年(一一七二)、養和二年(一一八二)に開催されたことが知られている(別表)。このうち特に嘉保三年・承安二年・養和二年の尚齒会は、それ以外の尚齒会が詩会であるのに対し、和歌尚齒会と呼ばれるものである。おおむね白居易の先例に基づいておこなわれた漢詩の尚齒会から、和風の和歌尚齒会へと展開を見ていることができる。本稿で問題としている『明月記』の記事には「和歌」尚齒会と明記される。

後藤昭雄氏の整理によると、⁽¹³⁾平安時代の尚齒会は、①会する老人(六十歳以上)は七人で、②会がおこなわれるのは三月であり、③七叟のほかには垣下と呼ばれる陪席者が参加しておこなわれる。『明月記』の本断簡の記事では、七老として明確なのは寂蓮だけである。が、本断簡に続く記事の存在により、⁽¹⁴⁾藤原実教以下の六名をあわせて七叟と考えることができる。ここで問題となるのは、建仁元年(一一二〇)当時、寂蓮は六十歳を超えていたと思われるものの、他

の六人は最高齢の藤原実教で五十二歳、最も若い藤原定輔は三十九歳で、後藤氏の条件①を満たさないことである。さらには、行事の実施日は四月二十二日で、②の条件も満たしていない。

つまり、これは正式な尚齒会ではなかった。日記本文には「尚齒会」と記されるが、定家自身が後にこの記事に与えた見出しは「模尚齒会事」で、尚齒会を模したもの、つまり尚齒会に準えた遊戯の一種だったようである。⁽¹⁵⁾

六、年代比定

本断簡は、家永香織氏の研究(注7論文)により、建仁元年四月二十二日条に比定されている。その根拠は、①尚齒会の第一座になっている寂蓮の『寂蓮集』⁽¹⁶⁾に、「鳥羽殿御遊建仁元年四月和歌船にて」として詠まれた一四九番歌が、本断簡の記事に関連すると思われること、②『明月記』同年四月二十二日条の末尾と推定される断簡⁽¹⁷⁾には南殿を舞台に船の描写があり、内府(源通親)や寂蓮が登場すること等である。

この年代比定はきわめて妥当と思われる。付け加えるほどのこともないが、建仁元年(一一二〇)正月二十九日に皇后宮大夫となった藤原実教が「皇后宮大夫」の名で登場し、建仁元年(一一二〇)中(九月?)に検非違使別当に任じられて以降「別当」と称されることの多い藤原定輔が「左兵衛督」の名で登場する点などは、⁽¹⁸⁾建仁元年四月の記事としてまことに相応しい。

七、結 語

以上、専門分野の研究者にとっては自明の事柄ばかりを、紙面の無駄との批判を恐れながら、あえて記してみた。鮮明な写真を掲載し、最低限の解説を加えたことで、一応、所蔵機関としての責務は果たせたのではないかと考えている。今後の研究に資するところがあれば幸いである。

【注】

- (1) 冷泉家時雨亭叢書『明月記』（全五冊、朝日新聞社、一九九三～二〇〇三年）
- (2) 『明月記』第一～三（国書刊行会、一九一一～一二二年）
- (3) 辻彦三郎「明月記自筆本並びに断簡現存目録」（『藤原定家明月記の研究』、吉川弘文館、一九七七年）
- (4) 『明月記』原本及び原本断簡一覽稿」（『明月記研究』七号、続群書類従完成会、二〇〇二年）。
- (5) 尾上氏が依拠されたのは、東京古典会『古典籍下見展観大入札会目録』（一九七五年）八四頁に掲載された図版である。
- (6) 尾上陽介編『明月記 徳大寺家本』第八卷（ゆまに書房、二〇〇六年）年月日の推定は、家永香織「『明月記』建仁元年四月記断簡及び東山御文庫蔵「未詳日記抄出」紹介」（『明月記研究』九号、二〇〇四年）による。
- (7) 半田公介『日本の作家100人 寂蓮 人と文学』（勉誠出版、二〇〇三年）一一頁
- (8) 『一代要記』（改定史籍集覧）には建仁元年（二二〇一）九月二十日に補任とある。
- (9) 『古事類苑』礼式部十八算賀下、後藤昭雄「尚歯会の系譜」（兼築信行・田渕句美子編『和歌を歴史から読む』（笠間書院、二〇〇二年）所収）等を参照

- (11) 後藤昭雄「嘉保の和歌尚歯会」（『文学』第四卷第五号、岩波書店、二〇〇三年）、同「尚歯会和歌」（冷泉家時雨亭叢書第六期第四十六卷）和漢朗詠集 和漢兼作集 尚歯会和歌（朝日新聞社、二〇〇五年）所収）
- (12) 後藤昭雄「安和二年栗田殿尚歯会詩考」（『国語と国文学』六四―二、一九八七年）
- (13) 後藤昭雄「尚歯会の系譜」（注10論文）五二頁
- (14) 家永香織「『明月記』建仁元年四月記断簡及び東山御文庫蔵「未詳日記抄出」紹介」（注7論文）によれば、東山御文庫には「未詳日記抄出」と題する『明月記』の断簡があり、その本文の前半部分が本断簡に相当するという。つまり、もともと本断簡の左には文章の続きがあり、現在の姿に切断される以前につくられた写本が「未詳日記抄出」である。切断された左半の原本の所在は不詳だが、写本の存在によって本断簡を含む同日条全体の内容を理解することが出来る。その本文釈読については、家永論文を参照されたい。
- (15) 家永香織「『明月記』建仁元年四月記断簡及び東山御文庫蔵「未詳日記抄出」紹介」（注7論文）一〇三頁
- (16) 『新編国歌大観』第四卷 私家集編Ⅱ（角川書店、一九八六年）
- (17) 辻彦三郎「明月記自筆本並びに断簡現存目録」（注3論文）に建仁元年四月二十二日条として掲載される。その写真は、小松茂美『日本書流全史 下 図録』（講談社、一九七〇年）図版一三一、波多野幸彦『書の文化史―書状にみる人と書―』（思文閣出版、一九九七年）一四頁に掲載されている。
- (18) これまで確認できた範囲では、定輔が「左兵衛督」の名で『明月記』に登場する最後は建仁元年三月二十二日条であった。本断簡により、四月にはまだ検非違使別当に任じられていない可能性が高くなった。なお「別当」での初見は同二年正月六日条である。

※掲載写真は当館学芸課の森村欣治が撮影した。

（のじり ただし／当館学芸課研究員）

別表 平安時代の尚歯会

年	西暦	月日	七叟(○は主催者、〔 〕は当時の年齢)	垣下	典拠史料
貞観19	877	3月	○南淵年名〔70歳〕、大江音人〔67歳〕、藤原冬緒〔70歳〕、菅原是善〔66歳〕、文室有真、菅原秋緒、大中臣是直	菅原道真	『扶桑略記』同年3月条・4月9日条(南淵年名薨伝) 『本朝文粹』巻九(菅原是善詩序) 『菅家文草』巻二
安和2	969	3月13日	○藤原在衡〔78歳〕、菅原文時〔71歳〕、橘好古〔77歳〕、高階良臣、菅原雅規〔51歳?〕、十市有象、橘雅文	菅原国光ら17人の名が知られる	『日本紀略』同日条 『本朝文粹』巻九(菅原文時詩序) 『尚歯会詩』 『栗田左府尚歯会詩』
嘉保3	1096	3月	源経仲、高階経成〔77歳〕、藤原成季〔70余歳〕、大中臣輔弘〔69歳〕、藤原時房〔80余歳〕、平基綱、観心〔90代半〕、慶基法師、筑前尼	安祐ら12人の名が知られる	『尚歯会和歌』
天承元	1131	3月22日	三善為康〔83歳〕、藤原基俊〔76歳〕、中原広俊〔70歳〕、○藤原宗忠〔70歳〕、藤原敦光〔69歳〕、藤原実光〔63歳〕、菅原時登〔62歳〕	15人(『長秋記』)。源師時ら5人の名が知られる	『長秋記』同日条 『百鍊抄』同月20日条 『本朝無題詩』巻一 『古今著聞集』巻四(文学)
承安2	1172	3月19日	藤原敦頼〔83歳〕、顯広王〔78歳〕、祝部成仲〔74歳〕、藤原永範〔71歳〕、源頼政〔69歳〕、○藤原清輔〔69歳〕、大江維光	藤原重家ら9人の名が知られる	『百鍊抄』同日条 『愚昧記』同日条 『暮春白河尚歯会和歌』
養和2	1182	3月	祝部成仲〔84歳〕、勝命〔71歳〕、俊恵〔70歳〕、祝部家能〔65歳〕、祐盛〔65歳〕、○賀茂重保〔64歳〕、藤原敦仲〔62歳〕	賀茂重政ら2人の名が知られる	『古今著聞集』巻五(和歌) 『月詣和歌集』第七

【注】

*『扶桑略記』『日本紀略』『百鍊抄』は新訂増補国史大系本(吉川弘文館)による。

*『本朝文粹』は新日本古典文学大系本(岩波書店)による。

*『菅家文草』『古今著聞集』は日本古典文学大系本(岩波書店)による。

*『長秋記』は増補史料大成本(臨川書店)による。

*貞観19年度について

1) 七叟の年齢は『公卿補任』等による。

*安和2年度について

1) 七叟の年齢は『公卿補任』等による。

2) 菅原雅規が60歳に満たないのは、やや不審。

3) 『尚歯会詩』(徳川美術館蔵)については、後藤昭雄「安和二年栗田殿尚歯会詩考」(注12論文)による。

4) 『栗田左府尚歯会詩』は『群書類従』第九輯(文筆部)に所収。

*嘉保3年度について

1) 七叟の年齢は、後藤昭雄「嘉保の和歌尚歯会」(注11論文)による。

2) 尚歯会は通常7名の参加でおこなわれるが、このときは9名の参加が知られる。

3) この尚歯会的主催者は不詳。後藤昭雄「嘉保の和歌尚歯会」(注11論文)は源経仲かと推定する。

4) 『尚歯会和歌』は冷泉家時雨亭文庫蔵本(注11参照)による。なお、同書は『尚歯会記』(岩瀬文庫蔵)の名でも知られる(後藤昭雄「嘉保の和歌尚歯会」〈注11論文〉参照)。

*天承元年度について

1) 年齢は『古今著聞集』による。なお、同じ尚歯会を記した『長秋記』では三善為康を82歳、藤原基俊を72歳、藤原実光を62歳とする。また、中原広俊の姓を『長秋記』は「清原」とするが、『古今著聞集』にしたがう。

2) 『本朝無題詩』は『群書類従』第九輯(文筆部)に所収。

*承安2年度について

1) 藤原清輔の年齢は『暮春白河尚歯会和歌』によった。他は『愚昧記』同日条(『古事類苑』礼式部十八算賀下に所収)による。

2) 『暮春白河尚歯会和歌』は『新編国歌大観』第五巻、『群書類従』第二十九輯(雑部)に所収。

*養和2年度について

1) 七叟の年齢は『古今著聞集』による。

2) 『月詣和歌集』は『新編国歌大観』第二巻(709番歌)、『続群書類従』第十四輯上(和歌部)に所収(該当記事は127頁)。

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第九号

平成十九年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷・製本

株式会社天理時報社
天理市稲葉町八〇番地